

アメリカン・ソーシャルスキル学習における演技の他者評価(1): 導入的な5スキルに対する学習者のパフォーマンスへのネイティブのコメント

岡山大学社会文化科学研究科・田中 共子
一橋大学法学研究科・高濱 愛

【序】

アメリカで語学研修を行う予定の日本人学生に、渡航後の異文化適応を支援する狙いから、アメリカ文化の行動文法を、対人関係形成に焦点を当てて認知行動的に学ぶという、アメリカン・ソーシャルスキル学習を開発する一連の研究を展開中である(高濱・田中、2009a, 2009b, 2010a; 田中・高濱、2008)。そこでは渡航準備のための異文化間教育として、心理教育的セッションを提供しようとしている。

先に行われたセッションでは、演技者は課題場面の設定に基づき、自由にロールプレイを繰り返し、肯定的なフィードバックを得て行動形成を進めていった(高濱・田中、2010b)。留学経験を持つ講師や留学経験者の先輩学生、他の日本人参加者の意見に加えて、ネイティブによるコメントも、質疑や助言に生かされた。こうした渡航前のアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションに、アドバイザーとして参加したネイティブ学生数名は、セッション中の他者評価として、演技のよかった点や更によくするための工夫についてのコメントを残している(2010b, p74)。セッションでは講師やネイティブの助言者は、新規な文化的行動を試していく場での肯定的な雰囲気重視のため、あえて否定的なコメントを避けている。その代わりに行われているのは、適切に行なわれた行動をほめることで正の強化をはかり、他者やネイティブの行動のモデリングを加えて行動形成をはかるという方法である。彼らの評価は総じて肯定的で、不足の点を明確に指摘するようなフィードバックはまれであった。彼らはフィードバックでは寛容な助言を提供してくれたが、建設的な情報はQ&Aで求めることができた。表現の改善方法など、問題解決的な質問とそれに対応する助言が行なわれ、学習者は関心に即して、修正の手がかりを得ていた。

こうしたセッション中のネイティブの助言役は、日本に留学中のアメリカ人の交換留学生がつとめていた。日本人の発想や行動のパターンをよく承知しており、好意的に受け止めてくれる点は、助言者として優れた点と考えられる。しかし学習者は渡航後には、日本人をよく知らないネイティブと多くつきあうことになる。米国在住の一般的なネイティブの大学生は、日本人学生の演技をどう評価するかも、考えておく必要があるだろう。また否定的なコメントが許容される設定をとった場合に、ネイティブ評価者はどのような気づきを報告するのもかもおきたい。

在日外国人留学生を対象とした異文化間ソーシャルスキル学習においては、学習者である留学生の主観評定の向上に加えて、セッションと関わりのない第三者のネイティブの日本人学生の評価を測定しており、主観的な自己評価と客観的な他者評価を併せて評価を多角化している(田中・中島、2006)。我々が先に行った、アメリカ留学予定の日本人大学生向けのセッションでは、演技の自己評価において、参加者の主観的な向上感が確認されている(高濱ら、2010b)。しかし、セッションでネイティブが助言役を勤めながら与えた以外の、より一般的なネイティブの視点からの評価はまだ確認されていない。本稿では、ビデオで記録したセッション中の演技に対し、米国在住のネイティブの大学生の協力を得て、彼らによる演技の他者評価を得たので報告する。

今回、ネイティブ評定者に評価を求めたねらいは、以下の二点である。一つには他者評定によってパフォーマンスの評価を多角化しながら、パフォーマンスの質と変化を分析すること、もう一つは学習者のパフォーマンスを向上させる具体的な助言を広く得ることである。求めた情報量は多く、本稿においてはセッションの前半、すなわち比較的難易度の低いスキルを扱った部分をとりあげることとした。また評価のうち、比較的自由に着眼点や印象を記した自由記述の部分のみに、焦点をあてた。数値的な評定の部分や、セッションの後半への評価は、稿を改めて報告することとしたい。

【方法】

1. セッションの構成

設定 高濱ら(2010b)に、学習者の反応と共にセッションの詳細を示してある。概略を記すと、アメリカへの短期語学研修を予定している日本人大学生に、準備のための学習会を呼びかけ、賛同者に2日間にわたる合計9時限分のアメリカン・ソーシャルスキル学習を実施した。参加の謝礼として、文房具と書籍を渡した。講師は本講筆者2名で、ともに米国への留学経験を持つ。セッションのアシスタントとして、学習者と同じ大学の学生2名を雇用し、ビデオ記録や会場の準備などをしてもらった。同じ大学に在籍するネイティブの男子交換留学生1名が、助言役として参加していた。

学習者 X大学の女子学生4名(S11、S12、S13、S14)。年齢は19歳から22歳。

学習内容 オリジナルテキストから、学習者のニーズに対応させた以下の9スキルを学習した。初日には、スキル1(聞く態度—笑顔、アイコンタクト—)、スキル3(友人を作る)、スキル4(先生に質問する・相談に行く)、スキル5(授業で自分の意見を言う)、スキル6(先生に要求を伝える)。2日目には、スキル7(主張・交渉する)、スキル8(依頼された援助を断る)、スキル9(自己開示する)、スキル10(ジョークを言う)。これらのスキルは、田中(1994)をベースに学習者のニーズに合わせた選択と調整を行ったものである。学習者が留学後に出会いそうな課題場面を設定して、ロールプレイをしながら学習していく。一つのスキルにおよそ1時限分となる90分をあてた。学習する順番は、およそ難易度の順になっている。本稿で分析の対象としたのは、1日目のスキル1からスキル6までの5つのスキル学習における評価である。

2. パフォーマンスの他者評価

設定 200X年某月に、アメリカのP大学に所属、またはP大学を卒業したアメリカ人学生を対象に調査の主旨を説明し、ボランティアでの協力を同意した者全員に対し、評定を依頼した。

評定協力者 男性10名、女性2名、合計12名のアメリカ人大学生。年齢は20から30歳代。このほか、アジア国籍の男子学生2名と、日本人女子学生1名も評定に参加したが、文化的背景の違いに鑑みて今回の分析対象からは省いた。なお協力者の都合により、スキル毎に評価者数に多少の変動があるが、本稿では、コメントの質的な広がり重視して、評価者を絞り込むことはせず、記載された全てのコメントをとりあげた。なお今回とりあげた前半の5つのスキルに関しては、協力者12人による全てのスキルへの評価がそろっていた。

評定方法 セッションでは、一つのスキルにつき、説明をはさんで2回の演技が繰り返されており、いずれもビデオ機を用いて録画されている。その演技の1回目と2回目を録画したDVDの映像を評価の対象とした。1人1スキルずつの演技を再生後に、評定用紙に評価を記載してもらった。1回目の演技の再生が全員分終わったところで、2回目を録画したDVDを再生し、同様に評定用紙に記載してもらった。この方法で、全ての演技の映像を再生し、全てのスキルの評価を記載し終わるまでに約4時間を要した。

評定用紙 評定用紙は、セッション当日に日本人学生が演技の自己評価に用いたものと同じのものを、英訳して使用した。これは、スキルの評価ポイントをミクロ・マクロの二面に大別して設定し、それぞれ課題場面に応じた数項目ずつを設けたものである。各項目に対しては、10件法で評価を求めた。加えて評定用紙の余白にコメント欄を設け、演技の総合評価や演技向上に向けてのアドバイス等を自由に記載してもらった。この記載は義務化されていないため、特に記すことがないと感じた場合には記載はされず、空欄のままになる。

分析 本稿では、上記の評定用紙の中の自由記述欄に焦点を当て、以下に記述を具体的に紹介し、演技へのコメントとして集約する。加えて、それと自己報告との対応をまとめ、パフォーマンスの向上について検討する。なお後半のスキルについて、および数値的な評定部分については、稿を改めて報告する予定である。

【結果】

1. ネイティブ評価者による具体的な指摘

ネイティブ評価者によるコメントの概略を、表1、表2、表3、表4、表5に示す。コメントには評価できる点などの肯定的な評価、不足している点などの否定的な評価、向上のための助言、総合的な感想が含まれているので、それらを分割して整理した。「とても」とか「やや」などの修飾的な副詞は適宜省いてあり、指摘された内容を中心に抽出してある。

スキル1では、1回目の演技においてはユーモアへの評価は分岐し、楽しい冗談だとする者と十分面白くはない冗談だったとする者が混在している。2回目の演技においては、総じて上達した、ないしはよかったとするコメントが見られるが、視線や動作などの非言語要素には、よりいっそうの向上を期待する記述が目立つ。

表1 ネイティブ評価者による自由記述の概略：スキル1

スキル1 1回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A7:彼女のユーモアが好き、 A13:最高のセリフ	A8:冗談がない、A9:歌う のが少し不自然	A7:下準備が必要	A6:役者にあえるといい
S12	A6:創造性がある表現、A13: 笑顔が可愛い	A8:冗談がない、A13:話は それほど面白くない	A7:文法に気をつける必要 がある、A9:(文法の誤りの 指摘)lookingではなく watchingという、A17:冗 談が必要	—
S13	A7:冗談とユーモアがとて もよい、素直でよい、A13:あ まり面白くないが面白い話	A8:言葉遣いがあまり普通 ではない、A17:体重の話 は自己批判しているようだ	—	A6:新しい名字になるといい、 A8:彼女と結婚する
S14	A6:怪物の話は面白い、A7: 自分を表現できていた	A8とA17:冗談がない	—	—

スキル1 2回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A8:よくなっていた、機嫌が 良かった、A12:内容と発表 がよい、A14:声がよりはつき りした、A16:話し方が上達	A8:まだ緊張、A13:前回より 流れが悪い、A14:スカーフ やセーターを常に触っていた、 A15:手の動きがよくない、A16: アイコンタクトがよくない、あま り自然に見えない	A9:視線が動き回るので一 定の場所に数秒集中して から視線を外すとよい、A10: もっと笑顔、A12:手を弄ば ず集中して、A17:袖とスカ ーフを放っておくこと	A11:「一緒に映画に行こう」 というと異性に好意があるよ うだ
S12	A6:とてもよくできた、手の動 きも友好的、A7:前回より自 信あり、より滑らか、A8:笑顔 はよかった、A9:手の動きが あって助かった、A10:よか った、A12:発表の仕方はよい、 A13:もっと自然、A14:前回 より笑顔で落ち着いていた、 A16:上達していた、笑顔が 多く手の動きもよい	A8:情報が少ない、動きが 鈍い、A9:まだ考え事をする たび視線が変わる、A11: "I'm hoping to be your friend."はぎこちない表現、 A12:少し不自然な内容、 A13:自己紹介が発展して いない、A16:何度か下を 見ていた	A6:もう少し目を合わせれば 完璧、A10:スポーツ以外の 話をいれてもいい、A17:年 齢等を足して手の動きをも っと自然に	—
S13	A6:スタートはよかった、A7: 繰り返した以外はよかった、 A12:発表自体は悪くない、 A14:あまり笑顔ではないが 大丈夫、アイコンタクトがよく なって印象的、A16:前回に 比べると弱かったがそれでも 良くできていた	A6:徐々に目を合わせなくなった、 わざとらしく、A8:硬く緊張 していた、長すぎて前回より悪 かった、A9:始めがかたくつま らなかった、前回より緊張し自 然でなかった、手の動きもわざ とらしく、A12:演技が不自 然、A13:前回ほど滑らかでなく 戸惑いと途切れが多い、A15: フルートの手真似が不自然、A16: フルートの手真似はかわいい が少し変わっている	A6:自分らしく振舞うように、 A7:繰り返しをしないように、 A10:話すときは聞き手 の方を見るように、A11:友達 になろうと直接にいうのは 避ける、A17:ゆっくりはなし て間を入れるように	A11:内気
S14	A6:表情がよかった、A7:前 回から上達、具体的な表現 がつかえていた、A8:よい、 A12:発表は良い、A13:もっ と自然、アイコンタクトもよい、 A14:前回より理解しやすく 上達、A16:笑顔が少し増え た	A6:目の合わせ方がよくない、A8: かたく緊張、手を長く組んでい うて怖がっているように見えた、 A9:手をたたくくさが緊張を表わ していきこちない、A10:台本 を読むようで面白くない、A11: いきなりミュージカルに誘って いる、A12:演技が少し不自然、 A15:ずっと手を握りしめていた、 A17:おびえているように見えた	A6:もっと笑顔で落ち着くよ うに、相手と交互に話すよう に、A7:手は前で組まない、 A10:もっと自分ならではの 話を入れて親しみやすく、 A16:笑顔やアイコンタクトを 直す努力が必要、A17:もっ と声を大きく笑顔で	—

表2 ネイティブ評価者による自由記述の概略：スキル3

		スキル3 1回目の演技			
		肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A11:話しかけ方はよい	A7:友達になろうと普通は聞かない、A8:個人情報がなくねなれしくて緊張、A9:違う意味で捉えられてしまう可能性あり、A11:少し要求が大きい、A13:何度も止まって不自然、袖をいじっていた、A14:かなり思わせぶり、A15:率直過ぎる、A16:緊張からアイコンタクトと手の動きが乏しい、あまり自分の興味・経験について話していない	A6:目を合わせて落ち着いて、A10:会話の開始は授業に関する質問等で徐々に自分を紹介して相手の情報をきくとよい。相手にあまりプライベートなことは聞かない方がよい、A12:もっと質問をするか、共通な話題を入れた方がよい、A16:相手を誘うより自分の話をした方がよい、A17:すみませんと声をかけた方がよい	_____	_____
S12	A8:優しかった、A12:悪くなかった、A16:気さくだった	A8:ちょっと馴れ馴れしかった、A9:握手が長すぎた、A11:会話の切り出しがふざけすぎ、A13:導入が強引すぎる、握手後手を離さなかった、A14:率直過ぎて少しごちない、A16:不自然、握手が長すぎた、A17:握手がごちない、"Do you want to talk to me?"とは言わない	A6:もう少し笑顔にすると親しみやすい、落ち着けば大丈夫、A7:名前を聞く前に"hello"を入れるとよい、握手は1回で十分、A8:もっとゆったり、A10:知らない人に話しかけるときは気軽に、A11:始めに"How are you?"と聞いた方がよい、A12:自然に、A13:もう少しゆったりアプローチ、A17:握手は1回で手を離すようにし、会話の導入は"Are you waiting for class?"等がよい	_____	_____
S13	A6:よくできていた、A7:でだしがよく、"Do you have a minute?"と聞いたのもよい、A8:でだしはよい、A10:会話の出だし等すごく良いところがあった、A12:悪くなかった、自然、A13:導入がよい、A14:出だしはよい、A16:出だしがよく友達作りに適していた、優しそうでよい笑顔、A17:会話の導入がよい	A6:発音が不明瞭で始めは理解しにくい、A8:デートの誘いのようで、後半が危なかった、A9:男性には違う意味で伝わるかもしれない、A13:"I want to be friends/to study"は強すぎる、A14:直接的すぎる、A15:アンケートに答えているようだ、A16:自分のことや興味の話ができていない	A11:友達になりたいことは直接伝えない方がよい	_____	_____
S14	A6:流暢で笑顔だった、アイコンタクトもよい	A7:出だしがよい、A8:なれなれしすぎてデートに誘うようだ、A9:違った意味に受け取られかねない、A10:直接的すぎる、A11:デートの誘いのようだ、A12:少しごちない、A16:表現が普通でない、自分のことをあまり話さず誘ったので不自然、友好的でない、A17:CD shopとはいわない、もっと自分について話してから誘うべきだ、少し唐突だ	A7:CD shopではなくrecord store等という、A12:もっと質問して自然に、集中して	A14:日本語を話さないアメリカ人もいる	_____

		スキル3 2回目の演技			
		肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6:流暢でフレンドリー、A13:フレンドリーであまり強引でなくよい、先生の話を出したのはよい戦略、A14:とてもよくできていた、共通な話題から始めたのはよかった、A17:先生の好き嫌いを話し合うのはアメリカ人と一緒	A7:文法が違って唐突、A8:情報が少なくはやすぎた、不自然、A9:違う受け止められかたをするかもしれない、A10:ナンパしているようだ、A11:デートに行きたいようなシナリオ、A12:手の動きが緊張感を表現、A14:もっと適切な言葉を選べただろう、A16:自分のことについて話すべき、不自然、A17:言い回しが不自然	A6:もう少し正式に、A7とA9:面と向かって話すように、A16:誘う前に自分のことを話すべき	_____	_____
S12	A8:馴れ馴れしさが減ってよかった、自然、A9:言葉遣いが場面にあわせてよい、A13:かなりよくなっていた、A14:会話の進め方が上達、A16:かなり良くなった、自分の興味を離し相手と共通の趣味を発見した上でパーティに誘ったのがとてもよい、友達を作るよい方法、上達した	A9:握手がまだ長すぎた、A13:視線の方向が悪く体がかたい、手を必要以上に握っていた、A14:体の動きが不自然	A6:軽い握手で十分、A7:Sports partyはアメリカにはあまりないので、一緒にテレビでスポーツを見ないかと聞くのがよい、A8:手を離す、A10:相手への質問と同じくらい自分の話をする、相手と自分の興味が同じと思わない、A11:友達になってほしいと頼むより既に友達だと思って話すとい、A12:握手はあまり長く続けられない、A15:長く手を握らない、A17:手を離す。Sports partyの代わりに、"We're going to watch the game."と言う	_____	_____
S13	A7:緊張がまくれてより社交的、A12:よくできていた、A13:とてもよい、A14:とてもいい演技、A17:よかった	A8:情報不足、速すぎた、A11:早く誘いすぎている、A12:あまり質問していない、A16:前回の方がよい	A6:自分の興味の説明を増やす、A9:違う意味を表すのでwith youをあまり使わない、A10:授業の話より友達自身に関する話をする、A16:自分の話をした相手のことを知ってから一緒に勉強すべき、A17:肩をたたかないように	_____	_____
S14	A8:馴れ馴れしさが減ってよい、A13:わりとよくできていた	A7:始めが唐突、A8:英語が不自然、A9:単語が不自然、A11:少し強引すぎる	A6:もっと自分の話をする、A9:もっとアイコンタクトを、A10:CD shopとは言わず店名を使う、A14:もっとはっきり話す、もっとうまくできるはず、A14:CD shopではなくmusic storeという、A17:CDを借りに行くといった方がよい、肩をたたかないように、何を言うか準備	_____	_____

表3 ネイティブ評価者による自由記述の概略：スキル4

スキル4 1回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A8:緊張減、A13:よかった	A6:緊張、自信不足、A9:緊張、A16:理解しづらい、説明が不明確、A17:もっと声を出して、明確に	A6:落ち着いてリラックス、A7:具体的に、自己主張して、A8:説明を修正、A9:いうことを前もって準備、A10:英語のハンディがあり助けが必要と説明すべき、A11:先生に断られる覚悟をすべき、A12:緊張しないように、A14:自信を持って	——
S12	A11:気持ちを効率よく表現、A12:よくできていた、A13:話し方はよい	A7:具体例不足、自己紹介の修正必要、A9:分かりづらい、よくわからない、A13とA16:「留学生で、助けが必要」と言っていないかった、A15:手を握りしめていた	A6とA10:問題を明確化、A8:情報を加える	——
S13	A7:心配事がよく伝わった、A8:よかった、A9:全体的によい、A11:助けが必要だったことが明らか、A12:とても分かりやすい、伝えたいことが明確、A13:状況説明が上手で話し方やスピードもよい、A14:とてもよい、アメリカ人もこのようにしている	A8:情報不足、A9:表現の一部が不自然、A16:もっと要点を明確化	A6:自信を持って、もっとアイコンタクトを、A10とA17:英語のため授業が難しいと説明した方がよい	——
S14	A6:とてもよい、アイコンタクトも言葉づかいもよい、A7:要求をよく表現し理解の確認ができていた、A8:明確でよい、A13:よかった、A14:とてもよい演技、A16:問題やニーズを伝えられていた	A9:単語が分かりにくかった、A10:ニーズや困難をもっと説明、A12:緊張が不明確さに影響、A13:視線がそれていた	A8:問題の情報がもう少し必要	——

スキル4 2回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6:全体的にとってもよい、A8:よくなった、分かりやすくなった、A9:前回より明確、ニーズや問題を述べてから助けを求められていた、A10:よくできていた、A11:効率よく要点や状況を伝達、A12:要点が分かりやすく不自然でない、A13:とてもよい、徐々に緊張減、A14:少し緊張した以外はよい、A17:いい感じ	A6:一部自信なく緊張、A8:また緊張、情報を加える	A10:もっとアイコンタクト、A16:留学生であり理解が難しいことを明確に説明する必要あり	A7:先生役は学生に座るように伝えてから相談するように
S12	A7:いい言葉遣いニーズを上手に表現、自信もった交流、A13:話し方がよく適切な言葉を選択、A14:文法以外は良い	A9:緊張、不自然な表現、A15:シャイで直接的すぎる	A8:情報と学ぶ熱意がもっと必要、A10:英語の問題をもっと説明、A11:緊張、サンキューの言い過ぎは不自然、A12:英語表現が不自然、A13:緊張、A16:留学生で英語が苦手と明確化すべき、手のジェスチャーももっと使う、A17:言語の問題だと伝達すべき、間をとるべき	——
S13	A6:とてもよくできていた、A7:上手な表現、オフィスアワーを理解、A8:よい、A9:よくなった、A12:よくできていた、A13:助けの求め方以外はとてもよい	A8:緊張、情報を加える、A9:一部表現が分かりづらい、A17:your classと言い過ぎ	A6:戸惑いをなくす、A7:もう少し具体的に、A8:緊張をほぐせば完璧、A10:もっとアイコンタクト、"Thank you for your time"等とお礼もいふべき、A14:少し要求が多いのでおさえたほうがよい、A16:留学生であり理解が難しいことを明確に説明する必要あり	——
S14	A6:よい、A7:先生の話を理解し上手に反応、A8:とてもよい、A9:言語の問題を明確に表現、A14:十分な演技、A16:問題説明と要求がよくできていた	A11:うなずきがうるさいかもしれない、A13:スピーチがとぎれアイコンタクトがよくない、A17:理解しづらい	A6:返事の前に間をおく、A7:もう少し具体的に、A8:少し緊張をほぐせば完璧、A10とA17:授業をほめるより要点や解決法について直接に話す、A12:もっとアイコンタクト	——

表4 ネイティブ評価者による自由記述の概略：スキル5

		スキル5 1回目の演技			
		肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	—		A6:課題から少し離れた、A7:短すぎてよくわからなかった、A8:事実だけで意見や要点がなかった、A9:意見が途切れていた、A11:少し疲れていた、A13:ディベートのできないスピーチ、シンプルで味気ない、視線も離れた、A14:常にメモを見ていた、A17:声が小さく明確に発音していなかった	A10:もっと自分の経験を加える、自信を持ってアイコンタクトを、暗記はやめるように、A12:もっとアイコンタクトを、読むのを減らすこと	—
S12	A17:一般的だが要点は伝わった		A7:一部以外よくわからなかった、A8:何も話していない、A9:よくわからなかった、A13:自分の意見を言ったようにみえない、A16:情報不足	—	—
S13	A9:意見を伝えていた、A11:振る舞いが分かりやすく理解されやすい、A13:簡潔、A14:理解できた、A16:話が苦手と説明したのがよい	A8:事実を述べるだけでは意見にならない、緊張、目的なし、A9:声が小さい、緊張、A13:ディベートに展開できない、A17:スピーチに統一性がなく文が不完全	A6:経験に基づく意見を述べ、自然になるよう落ち着いて、A7:もっと声を出して分かりやすく、A14:適切な言葉遣い、A16:自分の経験を話す、A17:要点をひとつずつ話す	—	—
S14	A9:いいところは伝わった、A13:意見や経験を上手に発表、A14:よい応答、ディスカッションの余地を残した	A8:情報や意見の証拠不足、A16:理解できなかった部分あり	A6:もっとアイコンタクトを、経験に基づく話を入れる、A17:最後にディベートのため、他の意見もあるかもしれないと提案すべき	A7:彼女は英語に興味を持ち重要だと認識して学んでいる	—

		スキル5 2回目の演技			
		肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A7:リスニングや会話は重要なのでそれに触れたのがよい、A8:よい、A9:よく話していた、意見が伝わった、理由の説明もよい、A13:とてもよい、上手な話、意見も多い	A8:短く意見が限られていた、A13とA14:アイコンタクト不足	A6:もっとアイコンタクト、声を出して、A10:紙を読まないように	—	—
S12	A7:前回より具体的に説明できた、A8:よくなった、A9:前回より計画が立っていた、A13:意見を拡大していた、A14:発言の裏の思いが伝わった、A16:よくなった、経験について話せた、A17:よい例示	A9:まだ意見が伝わらない	A6:もっとアイコンタクト、落ち着いて、A9:はじめに意見を述べる、A14:もっとアイコンタクト	—	—
S13	A8:よかった、意見を表現し、証拠でサポートしていた、A10:とてもよい、良い点や意見を述べていた、A11:よくやっていた、A13:話を拡大、A14:とてもよい発表、意見もよい、A17:最高、他人の発言に反論を加えられた、新鮮	A9:緊張、A13:回答が少し強制的	A6:もっとアイコンタクト、自然に、A7:流暢なのでもっと語彙を増やせば向上可能	—	—
S14	A7:上手な表現、A9:よく話せていて意見が伝わった、A11:意見は明確、A13:とてもよい、A14:いい発表	A6:一般論でなく自分の意見を入れる、A8:やりすぎで結論なし、途中で話がずれた	A13:自分の意見を発言	—	—

表5 ネイティブ評価者による自由記述の概略：スキル6

スキル6 1回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A7:助けを求め回答を理解できていた、A9:要件を述べられたA14:よい	A12:緊張、A13:表現不足から説明が推測にゆだねられた	A6:もっとアイコンタクト、明確に、A8:説明を明確に、A14:もっとアイコンタクト、A16:留学生であることを説明すべき	—
S12	A7:導入はよい、A9:直接要件をきけたのがよい、A13:理由は十分に説明できた	A8:説明を修正すべき、A13:言葉が不自然	A6:ニーズや困難を明確に表現、A14:もっとアイコンタクト、A16:もっと要求を明確に説明	—
S13	A8:よかった、A16:OK、A13:頑張っていた、A14:よかった	A8:緊張	A6:もっとアイコンタクト、落ち着いて、A7:next final examではなくfinal examという、A14:もっと自信を持ってはっきり話す	—
S14	A7:嘴まずに話せた、A8:よかった、A16:全部とてもよい、頑張って説明しようとしていた、A13:いい表現を選択、A14:よくできた	A8:要点までが回りくどい、A13:手を握り緊張、発音に途切れ	A6:自信を持って、A14:もっとアイコンタクト	—

スキル6 2回目の演技				
	肯定的評価	否定的評価	助言	その他(感想など)
S11	A6:よくできた、A7:よく助けを求められていた、A13:意見がありよかった	A8:情報不足、分かりづらい	A14:もっとアイコンタクト、A16:もっとアイコンタクト、留学生だと表現、A17:袖はいじらない	—
S12	A7:助けを求められていた、A10:終わりがとてもよい、私も同じことをする、A13:面白い説明方法で説明できた、A17:率直に要件を伝達できた	A8:質問が不自然、A9:はじめに違うことを表現、A11:日本語でテストを受けられたらというのは気取った印象、A14:急いでいるようだ、A18:表現間違いあり、説明不足、A17:文法間違いあり	A6:自信を持って	—
S13	A8:結論は良くなった、A10:ユーモアがよい、A16:上達していた、A17:導入がよい	A8:かたい感じ、A13:要点まで時間がかかった	A6:もっとアイコンタクト、A7:早めに目的を話す、A14:もっとダイレクトに	—
S14	A6:よくできた、A7:よく助けを求められていた、A13:意見がありよかった、A8:よくできた、A9:全体的によい、A10:"Thank you for your time"と言ったのがよい、A11:心配事を十分に説明、A13:理由をうまく説明、A14:とてもよい	A9:少し緊張、A13:あまり流暢でない、A17:下を向いて戸惑い内気でぎこちない印象	—	A7:先生が学生を知っている場合のシナリオ作りも必要

スキル3では、初回の演技においては誤解を招く表現への指摘があり、話を徐々に進めていくほうがよいと勧められている。2回目には、なれなれしさが減って良くなった、話題の展開が自然になったと評価されている。ただし唐突さはまだ残るとされている。助言としては、強引で唐突にみえる誘いを避け、相手を知ってから共同で何かするとよいと記している。

スキル4においては、最初の演技では切実さが伝わる一方で、緊張と自信のなさが感じ取られている。2度目の演技では説明の仕方が良くなったとされ、自信もうかがえるようになったと受け止められている。緊張や不自然さやシャイな感じはまだあるとされ、非言語面での適切さがさらに求められている。

スキル5では、1回目には内容が不十分で、意見や証拠の提示が不足していたとみられている。自分の発言を堂々と提示する態度で、経験や意見を述べてはどうかと提案されている。2回目には、経験や意見が話により入れられており、話題の広がりや情報の組み込みも成功していると評価されている。しかしアイコンタクトなどの非言語部分には課題が残り、もっと自分の意見を言ってもいいのではないかと記されてもいる。

スキル6では、当初の演技では頑張って説明していることは伝わっているが、緊張や迂遠さが多く指摘され、自信やアイコンタクトがもっと欲しいとされている。2回目には、よく助けを求めることができたとほめられており、説明も良いとされている。一方で、まだ情報が足りないとか堅さが残るとの指摘もあり、もっと直接的に表現することを求められ、アイコンタクトを勧められている。

2. 演技の自己評価と他者評価の対応

ネイティブ評価者のコメントのうち、2回目の演技に対するものと、自己評価(高濱ら、2010b, pp71-73)との対応を探り、表6、表7、表8に整理した。2回目のみをとりあげたのは、2回目の行動の方が学習されたスキルを反映しており、実践で繰り出されるパフォーマンスがそちらにより近いと考えられるためである。1回目は無意識に繰り出される、母文化の影響をより受けた行動に、どのような評価が与えられるかを推察すること適していよう。実践の際に問われる行動の社会的適切性をみるには、2回目がより重要な情報を含むものと思われる。

表中で、下線部は同種のコメントであることを意味する。また末尾の括弧内の数は、該当の内容を指摘したネイティブの人数を示す。評価者が多少変動しているため、正確な比較には適さないが、およその傾向を把握するため、対応の様子を整理してみた。その結果、自己評価と他者評価の記述内容に、一致の見られる部分があった。

一致した内容を見ていくと、1回目と2回目の演技の間の変化については、全学習者において、話題や情報や濃さなどの内容の充実が、共通して触れられている(表6)。2回目の演技で演技者が意識した点を見ると、S13以外の三人では、自らの意見や意志の表明が共通して指摘されている(表7)。S13自分のことを伝えようとしたものの、ネイティブ評価者の記述にはその内容は見られない。S12では、両者から笑顔が指摘されている。

意欲と課題に関する記述を見ると、S11以外の三人で、表情やジェスチャー、雰囲気、伝える内容について、共通した記載が見られる(表8)。S11では、いくつかの内容を豊かにしたい

表6 「一回目と二回目の演技で変わったと思う点」に関する自由記述にみられる自己評価と他者評価の対応

2回目で変わった点	学習者			
	S11	S12	S11	S13
スキル1	流畅。内容が濃い(1)。緊張減。	ジェスチャー実施(3)、好感獲得、友人になりたいと思っ てもらおうとした。	内容が多い、余裕。	人の反応を考慮。自分のこと を伝えたい、分かってもらい たい気持ちで。
スキル3	共通の話題で誘った(1)。明るさ。	先に自分の情報を伝達(1)。笑 顔、明るさを心がけた。	内容が自然。話すべき事を理 解。	質問の程度、話のきっかけ分 からず。焦り。
スキル4	必要な事を伝えられた(3)。積 極的。	自分の問題の内容と理由を説明 する努力。目上への丁寧さを 心がけた。	具体的。内容整理。落ち着き。	自信なし。緊張。基本マナー と接し方を理解。
スキル5	具体的。落ちついて頑張った。	自分の意見伝えられず(1)。ナ ーブス。	長さ(1)。余裕。	意見なし(1)。まともらず。
スキル6	順序立ててを心がけ。落ち着き。	緊張。表現しきれず。	何を話したらいいか理解。落 ち着き。	緊張(1)。混乱。

斜字は非言語、他は言語に関連が深い事柄。下線部はネガティブな内容。

他者評定のうち2回目の演技に対するものと、自己評価(高濱・田中、2010、pp.71-73)との対応を示した。

あみかけの部分は、同様のコメントが他者評定と自己評定で得られたことを示す。

末尾の括弧内の数は、同様のことを指摘したネイティブ評価者の数を示す。

表7 「二回目の演技で演技者が意識した点」に関する自由記述にみられる自己評価と他者評価の対応

2回目の演技で意識した点	学習者			
	S11	S12	S13	S14
スキル1	はっきり言う(1)。	笑顔(3)。	具体的。親しみやすさ。	自分をアピール。
スキル3	元気。積極性。	自分の情報をまず伝える。	自分のことを伝える。	自分のことを伝える。質問攻めせず。
スキル4	会話を止めない。	ジェスチャー。	丁寧に、かつ主張。	丁寧。分かり易さ。自分の要求を伝える(2)
スキル5	体験、意見(2)。	自分の意見を言う(1)。	体験を入れる。	具体的。自分の意見(3)。
スキル6	順序立てる	自分の気持ち、理由が伝わるよう。	順序を保つ。	落ち着き。丁寧。

他者評定のうち2回目の演技に対するものと、自己評価(高濱・田中、2010、pp.71-73)との対応を示した。

あみかけの部分は、同様のコメントが他者評定と自己評定で得られたことを示す。

末尾の括弧内の数は、同様のことを指摘したネイティブ評価者の数を示す。

表8 「学習者による実施への意欲と残された課題」に関する自由記述にみられる自己評価と他者評価の対応

3回目への意欲と課題	学習者			
	S11	S12	S11	S13
スキル1	相手に興味を持ってもらう。	ジェスチャー(1)。	ジェスチャー(3)。	笑顔(1)。親しみやすい雰囲気(1)。
スキル3	会話をふくらませる。	相手の服、持ち物に言及して会話を開始。	話を広げる。	ランチに誘う。楽しい雰囲気。
スキル4	流ちょうに。	特定の表現を追加。言語のハンディを説明(2)。	適切な表現(1)。	最大限ののんびりを見せる。要求伝達。
スキル5	知識を増す。	自分の意思。	自分の意見(3)。	声を大きく。
スキル6	表現を増す。	授業への意欲を伝える。	簡潔。	特定の表現過多を避ける。

他者評定のうち2回目の演技に対するものと、自己評価(高濱・田中、2010、pp.71-73)との対応を示した。

あみかけの部分は、同様のコメントが他者評定と自己評定で得られたことを示す。

末尾の括弧内の数は、同様のことを指摘したネイティブ評価者の数を示す。

と思っていることが記されているが、ネイティブ評価者と同じ着眼点はみられない。

いくつかの共通点が認められる一方で、何かをしようとしたなどの心がけの記述や、何かを意図したなどの内省的な記述は、比較的本人のみにみられる内容となっている。

【考察】

1. ネイティブ評価者による評価

ネイティブ評価者らが、一般的なアメリカの大学生として学習者の演技を見た場合、どのように受け止めたのだろうか。学習者の演技は、狙い通りに、対人関係の開始・維持・発展に有効なふるまいとして認知されたのだろうか。もしその意図に照らして十分な機能を果たせていないとしたら、どこで滞っており、何がどう改善されたら狙いを果たせるのだろうか。対人関係は相互関係を取り結ぶ相手があってこそ成立するものであるため、受け手の認知的な評価はこうした点で重要な意味を持つ。学習者にとっては、今回学習したスキルは渡航後にネイティブを相手に行なわれるとの想定である。相手の受け止め方を知っておくことで、自分のパフォーマンスが実践で評価されるかどうかを伺い知ることができよう。ネイティブ評価者の視点は、この意味で実践的に重要な情報といえる。また質的な評価の詳細は、学習者が演技を向上させていく手がかりでもある。ネイティブ評価者のコメントは実際にその行動を行なった場合の、反応と効用を予測させる情報なのである。

コメントには、話題の選択や話の運び方や非言語表現の適切性、好感を持った点や魅力を覚えた点、不自然さを感じた点や否定的印象を与えた点などが記され、さらに総合的にどのような印象を受けたかが述べられていた。

スキル1では、自分らしさの表出や積極的な自己表現を求めるところは、アメリカ人の自己紹介が自己アピールに近く、日本人の標準的な水準との乖離があることを示唆している。そしてより自然な話題提供にするには、唐突さを避ける話の運びが求められていることがわかる。冗談の評価が分かれたことは、ユーモアの評価が受け手の感性とも関わる微妙な評価点であることを示唆している。

スキル3では、ネイティブ評価者らが習慣としている関係作りの流儀は、まずは自己開示をしてからという姿勢のものであることがわかる。日本で共有される、相手を尊重して自分のことを控えめに出そうとする常識とは、多少異なるニュアンスが感じられよう。アメリカ人学生らにとっては、自分をよく知らせ、相手をよく知ってから何かを一緒にするのが自然であり、その前に何かしようと言われたり、最初に関係作りの了解を得ようとしたりする運びは、不自然にうつりがちであることが分かる。友人作りの手順や流儀には、文化差が存在すると考えるなら、効果的な行為を母文化の発想から繰り出すのは容易ではない。そこに、スキル学習が提供される意義があるといえるだろう。なお今回実施したような行動を渡航後に実践した場合に、誤解を招きそうな部分があることは、学習者が留意しておくべき点であろう。

スキル4では、ネイティブ評価者が求める説明の要点は、具体的な明確化であり、この点も日本の要求水準とは乖離があるところかもしれない。示唆的で控えめな表現よりも、明確な言

語表現が望まれている所に、アメリカ文化的な要望が読み取れる。

スキル5では、自分の独自の体験や意見には言うだけの価値があり、お互いにそれを求め合っているのだ、というアメリカ人学生らの発想が読み取れる。これも日本人学生にはいささか不慣れな考え方かもしれない。対話で求められるこうした態度を理解し、しかもそれを、外国語を使って堂々とした態度で、自然な感じで表明できるようになるには、練習が必要と思われる。

スキル6では、自分が困っているとき、堂々と説明をして助けを要求するという態度が求められているが、これも日本人学生には戸惑いがあるものと察せられる。

以上、5つのスキルを通してみると、日本人の常識とはやや異なる、アメリカ文化の特性が反映された考え方や行動の仕方に対して、学習者は違和感を与える傾向があり、特に初回の演技ではそれが顕著である。だが総じて2回目には上達が言及されているように、目線を合わせることができるようになっていたり、姿勢がよりリラックスしたものになっていたり、表現がよりの確になっていたりという、細かい行動のポイントが少しずつ獲得されている。彼らは1回目の演技の後に助言を受けており、発想の仕方を理解し、表現を教示されている。学習者がこうして知り得た要領を積極的に試すことで、しばしば好印象が生じ、効果的な行動として受け止められるに至っている。この点でセッション中のパフォーマンスの向上を、受け手側から確認した結果が今回のコメントと考えられ、セッションの効果を示唆する情報といえるだろう。しかし求められていることが十分にできたかという観点からみると、まだ要求を満たしきれていない点も残る。だが試行回数を増やすことで更に向上するだろうとの指摘もみられることから、練習回数を増やすことによる変化を、今後はみていく必要があるだろう。

ネイティブ評価者は、緊張や不安、言葉への迷いが学習者から感じられるということを頻繁に指摘している。セッションにおける他者の目への意識、異文化行動への不慣れ、外国語での対話という異質な設定などは、学習者を緊張させる要因として作用したと思われる。一生懸命演じている感じは伝わっているが、自然な態度になりきっていないともいえる。全体にもっと堂々と、萎縮せずにのびのびと演じるようにといった指摘も多い。だが学習者はこのセッションで初めて行動の要領を聞いて試しているのであり、まだ新規な行動を試用している段階にいるものと推察される。こうした行動が身につく、自然なものとして出現する、すなわち行動レパートリーの一部になるまでには、もっと練習や実践を繰り返しながら、判断や調整の仕方を覚えていく必要があるだろう。行動の獲得に、要領の理解と定着の二つの次元があると考えられるなら、セッションでは前者を主に導いており、言語面に緊張しながら2回の演技行なうことは、行動習得のいわば出発点に該当するだろう。この先の般化の過程は、興味深い研究上の問いとしてとらえておくべきだろう。

発音のわかりにくさや表現の不自然さといった表現上の不備は、繰り返しによってある程度解消されており、言語表現の修正は、学習者にとっては、感情面のコントロールよりは取り組みやすい課題だったのかもしれない。なお具体的な言葉遣いが確認できるよう、参加者の発言録は、別稿に文字起こしをした対話記録を紹介する予定である。セッション実施時に助言者と

して参加したネイティブ学生は、「相手との関係こそが重要」という点と、「正直に、前向きに、はっきりと」と指摘していた(高濱ら、2010b)。相手に与える印象を考えて、萎縮しないほうが好感を持たれるという指摘は、今回のネイティブ評価者と通じるものがある。

今回のコメントには、視線や表現などの具体的なポイントを指摘したミクロな内容と、全体的に受けた感じを評したマクロな内容が含まれた。ミクロ的にはたとえ不自然な点が残っていたとしても、マクロ的には許容範囲であるとするコメントや全体的な印象は悪くないとのコメントがみられた。人間の印象形成は、パーツへの加減的な評価ではなく、総合的なものであることが伺える。学習者は、言葉の正確さだけに注目するより、非言語を含めてアプローチの仕方の全体がみられているのだ、という基本的な考え方を認識しておく必要がある。

ネイティブ評価者の記述をみても、実際に言語表現の正誤の指摘はそう多くはない。多くの記述は、非言語面での適切さや不適切さの指摘、総体的な印象や全体として受け取ったメッセージの内容に費やされている。仮に教科学習として英語を学ぶという姿勢なら、語彙・文法の正誤に焦点があてられるだろう。だが対人関係の構築手続きとしての対話の場では、全体としてのメッセージのやりとりにこそ意味があり、言語表現はその一部をなすという位置づけであり、話題の選び方や展開の仕方、非言語表現を含めた全体が、評価の対象になっていく。例えば発音の不備が指摘されるときは、それが間違っているからというより、理解を損なうからという理由で指摘されるものと思われる。日本人大学生が自身の語学力不足を気にするとしても、交流相手は語学力を査定するために話しているのではなくて、対人的な交流を営もうとしていることを、理解しておくべきだろう。つまり語学学習と対人交流とのニュアンスの違いを、学習者は感じとっていく必要があり、効果的な対人行動のための着眼点を、留学前に認識しておくことが勧められる。

誤解を与えそうな態度の指摘がいくつかみられたことには、注意を払っておきたい。ソーシャルスキルは自分の意図するところを、正確に相手に受け止めてもらえるようにと考えて用いられる。誤解を招きかねない対応には注意し、予備知識を持っておき、誤解の発生を避けるよう努めたい。なおそのような行動が出現する背景には、日本的な解釈や枠組みに基づいた行動を無意識に表出していたり、要求水準の程度を見誤って過小または過剰な適用をしていたり、言語表現上の誤認をしていることなどが考えられよう。セッション中の指導では、演技者の萎縮を招かない程度に、誤解の可能性に軽くふれながら、情報提供という形でゆるやかに修正を誘うとよいだろう。

セッションでは、積極的に挑戦し試行錯誤をすることが推奨されており、その点では結果的にうまくいかないことでも、試そうとすることに意義があるという考え方をする。この意味で、学習者の行動が否定されることはない。ただ、セッションは特別な試用空間として設定されているが、実践の場に出たら、接したネイティブができるだけ好印象を持ち、対人関係を築くの役に立つことが期待される。効果に鑑みての行動の調整は、現場では不可欠である。セッションで習うということと、現実的に効果を上げるといふことの間には何があるのかは、今後より丁寧に探索される必要があるだろう。

2. 自己評定と他者評価の関連

セッション報告における学習者の自己評価を見ると、主観的な向上感が確認されている(高濱ら、2010b)。そこではセッションにおける助言役のネイティブ学生も、好意的な励ましを含んだ肯定的なコメントを寄せており、パフォーマンスの向上を積極的に評価していた。この点で、学習者とネイティブ学生の評価において、大まかな方向は一致していた。

今回は、学習者とネイティブ評価者の間で、両者はともに向上を認めているといえるだろうか。そして同じ部分に対して、うまさや不足などを、同じように認識したのだろうか。こうした問いへの手がかりを得るため、学習者のパフォーマンスへの評価が、学習者とネイティブ評価者の間で一致する部分を、先のセッションの自己評価部分との記述内容の対応から探った。

2回目の向上を評価する記述にはしばしば一致がみられ、この点で、ネイティブ評価者の評価の方向も、学習者と似ているということの確認がなされた。学習者による演技の工夫と努力も、両者にわりと理解されている。ただし演技者が努力したと思っている点を巡って、評価者が十分に変化を察知できたかという点、両者は必ずしも同じような受け止め方をしてはいない。いずれの受け手にとっても十分な内容と程度のパフォーマンスを示すという点では、学習者はまだ課題を残しているといえよう。

全体的に見ると、総じて自己評価に加えて他者評価でも向上を意味する記述が確認された。このことは、パフォーマンスの改善を多角的に裏付ける。数値的な情報処理を行った場合の一致については、さらに別稿で検討していきたい。

引用文献

- 高濱愛・田中共子 (2009a) 「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習の試み—アサーションに焦点を当てて—」『異文化間教育』30, pp.104-110.
- 高濱愛・田中共子 (2009b) 「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習セッションの試み—対人関係の開始に焦点を当てて—」『留学生教育』第14号、pp.31-37.
- 高濱愛・田中共子 (2010a) 「語学研修生を対象としたアメリカン・ソーシャルスキルの学習」『静岡大学国際交流センター紀要』第4号、pp.81-93.
- 高濱愛・田中共子 (2010b) 「米国留学予定の日本人学生を対象としたソーシャルスキル学習」『一橋大学国際教育センター紀要』創刊号、pp.67-76.
- 田中共子 (1994) 『アメリカ留学ソーシャル・スキル：通じる前向き会話術』アルク
- 田中共子・高濱愛 (2008) 「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャル・スキル学習：大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』第49号、pp. 31-48.
- 田中共子・中島美奈子 (2006) 「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」『異文化間教育』24号、pp.92-102.

註

1. 本研究は、科学研究費補助金・萌芽研究No. 19653099 (代表・高濱 愛) の助成を受けた。
2. 上記補助金による研究組織の代表者は本稿の第二著者であり、第一著者はその分担者である。研究の企画・実施・分析を共同して行った。本稿の主な執筆作業を第一著者が担当した。